



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Description	各務時報 92号、各務時報 94号と同時に撮影
Citation	各務時報, 93
Issue Date	1936-05-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77684
Type	article
File Information	A010_13929597102104110_Part1.pdf



各務時報

亭書屋談叢

奈良の盆地の村では小宇又は其以下の部落を垣内と云つて居るところが多い。垣内は聚落の外貌も一塊となつて居るが、其内の人々の社會關係も強固な集結をなして居る。此垣内には太神宮さまがどこでも祀つてある。垣内は太神宮様の崇敬者の集團だと見る事が出来る。だから太神宮さまは垣内の客觀的標識である。然し太神宮さまと云ふのは社殿もなく只一基の石燈籠があるばかりで、石燈籠一つが太神宮さまの全部で外には何も無い。此石燈籠に夜毎に垣内の家から順番にお燈明をあげる。一年中缺かす事はない。此習慣は餘程昔から傳はつて居るらしいので恐らく何百年以來つづけて來たのだらうと云はれて居る。私が見た或る太神宮さまの石燈籠には天正頃の年號の銘あるものがあつた。三百年以上の齡をもつて居る。昔は油皿に容れた燈心をともしたのださうである。其後日本蠟燭の時代を経て今では小さな西洋蠟燭を用ひて居る。

私は先年奈良の村を調査に行つた時、或る垣内の太神宮さまの側に立つて右の様な話を聞いて思はず心をうたれた事がある。何百年も續いて來た垣内の生命の心臓の鼓動にでも觸れた様な心地がしたのである。

春風秋雨三百年、村の内戸毎の浮沈、一村の盛衰、世の移り変わりの出来事、それ等のものをよそにして垣内の人々の此約束此法規は嚴平として存続して來たのである。守られる法規の内容、信ぜられる信仰の内容がよしどんなものであらうとも、守る態度信する態度の嚴肅さに私は屢々頭を下げる事があるものである。

この垣内の石燈籠も永い間のお燈明の煙で随分黒くなつて居た。其どこかに垣内の歴史や家毎の歴史が一つ一つ刻まされて居る様な心地がした。今夜お燈明をつけに行くとこのかたの娘は、其何百年前の先祖の人の顔も心も知らず昔は、風俗慣習生活の態度あらゆるものが幾多の變遷を経たものであらう。だが遠い先祖の生命が今の人の肉體に生きて居る様に先祖の心も今の人の心に生きて居る筈である。

夕陽の内にすつと遠方の垣内の太神宮さまのお燈明を幾つも見た。垣内の生命の火を見る様だつた。我々の學園には新しい同行が又やつて來た。學園は云はば一つの垣内である。一人ひとりの心の悩み心のおごりは様々であるであらうが、學園の生命の火は永遠にともして行かなければならぬ。(芒亭)

各務時報

亭書屋談叢

春も半ばを過ぎて居ると云ふのにまだ炬燵を置いて居る或る山村の話です。産業組合などもあるにはあるが殆ど無いのも同然で、村民は總て新しい經濟組織への訓練はまるで出來て居ない風でした。あらゆる生活態度が古くからの傳統にしみこまれて居るのです。村中一家の様に親しくして居る様子でしたが生活には皆随分困つて居ました。この村に東京の或る大學にかよつて居る青年があるのです。「其人が卒業したら村に歸つて指導してもらつたらよいでせう。」

「もつたない。こんな山奥の村に歸るもんですか。」
「でもさうするのがその人の義務ぢやないでせうか。村の此現状を知つて居りながら、又指導すべき學術を學んで居りながら、」

「成功してくれる事を皆望んで居ります。大いに都會で成功してもらふんです。村の名譽です。」

こんな小さな村の爲にでなく日本の爲につくして貰いたいと云ふのである。村は村でどうにかなる。後顧の憂ひなく青雲の志豊かに大いに活躍しろと云ふのです。私はその青年が村中の人々に送られて歸する聲援の聲をあとにして村のはづれを出て行く時の感激を想像したのでした。又都會の喧騒の中で彼ののみすばらしい小さな姿も思つて見るのでした。

日本がよくなれば村は青ざめても、一人の戦士を出した事に無限の名譽を感じて居るのです。

私は村の人々と少しでも村がよくなる事を一緒に考へて見たいと思ひ込んで居たのですが、此考へ方が抑も都會的だつたのです。

その日の夕方私は重苦しい足どりで次の村に向ひました。途中大きな石の碑がありました。戦死者の忠魂碑でした。

各務時報

亭書屋談叢

此の十月は此の邊の農村では祭の月である。佐藤信淵の田畧年中行事卷下の田畧常務第十の章は、農村の十月の行事を書いたものであるが、そのうちに次の様な一節がある。「凡そ農民は愚直なる者にて幾日こそは神事にて賞讃を存分に極むべし。然れば其の前に骨を折て諸事皆能く調遣べしと諭す時は衆人談合して互に相勵み、一日二三日の業を仕終事あり。蓋し百姓を率育するに、年中唯一向に農事を勉強すべきのみを下知して時々遣問を爲しむるの仁政なければ、心氣の活潑する事無くして必ず羸弱し、農業を勤むるの適悦からざるよりして云々。」又曰く「……鎮守祭の拜殿に於て酬禮を行ひ、乃ち神輿を昇出し鎮、大鼓大角等を鳴らし、大衆を爲て郷里を練行かしむべし。實是知しむべからざるの玄機にして、卒知の民を愚直に復すの妙道なり。故に我家の農政學は祭禮新式を奥秘の傳とせり。」

農村と農民に關する信淵の識見には自ら頭が下るものが多いけれども、江戸時代の農政學者が皆さうであつた様に、彼も亦農民を人として尊敬する所以を忘れて居た様である。

農村は農業が營まれてゐるところであると共に、人々が生活して居るところであると云ふ事を忘れてはならぬ。農民は農業者であると共に亦人である事を忘れてはならぬ。まして農民は江戸時代に於ても、領主への納租者としてのみ見るべきではなかつた筈である。

農村の秋祭りは五穀豐稔に對する神への感謝であり、自己の制作の完成の歡喜である。自然の誠と人の誠の合作が今や完成した喜びの抑へきれぬ表はれである。

秋の靜なる夜、遠いところから聞えてくる村祭の太鼓の音を聞き入る時、私はいつも妙に感傷的になる。そして農民に祝福あれと心から祈るのである。(芒亭)